



# 人種・民族的アイデンティティの再構築について

すずき かずこ  
鈴木 和子

●テキサスA & M大学・社会学部・准教授

私が日本を離れて海外に住むようになったのは、ちょうど1990年代半ば。それまでは、自分が日本人であることを何かの折に誇りに感じる（例えば、日本人研究者がノーベル賞を受賞したり、アスリートがオリンピックでメダルを獲得した時など）はあっても、何故自分は「日本人」であって、そのことが如何に自分の人生に係わってくるか等、胃が痛くなるまで深刻に考える必要はそれほどなかった。

日本の法律によれば、日本国籍を有する者は「日本人」である。しかし、実際のところ、この「日本人」の定義は、一般の日本人が「日本人」とみなす「日本人」の定義と相当乖離がある。1980年代後半、日本経済がバブルを謳歌していた頃、労働力不足を暫定的に解決する方法として、外国人労働者をゲストワーカー的に採用することの是非が熱く論じられた。その中で、特に脚光を浴び、実際に日本政府によって実行されたのは、かつて日本が貧しかった頃に南米へ移民した日本人の子孫を、優先的に受け入れるという政策である。南米からの日系人の受け入れは、戦後の、「日本人の血」を重視する「日本人」の定義にもかない、他人種の移民よりは感情的にも受け入れ易かったのだろう。世論も彼らの受け入れに納得したかのように思われた。ところが、実際に南米から来た「日本人」の子孫は、外見上は「日本人の血」を受け継いではいたが、「日本人」らしさ

を喪失してしまい、文化的にはむしろラテン系。多くの日本人が、文化でも「日本人」らしさを表現していないと、「日本人」ではないのだと気づかされた。したがって、ある研究者の言を借りるならば、一般の日本人は、国籍・文化・血統の3つが「日本人」として一致して、はじめて「日本人」だとその人を認識するというのである。私はこれを「3+（スリー・プラス）の日本人」と呼んでいる。そして、この3つの変数を「日本人」として満たさない、「3-（スリー・マイナス）の外国人」という概念が対極に位置する。

「3+」等というと、なんだか傲岸のように聞こえるかもしれない。しかし、この言い方は、日本に住んでいる多くの日本人が、自分が日本人であるという「視えない特権」を、日々享受しているということを喚起するのに役立つ。例えば在日コリアン。4世・5世ともなれば、文化的にも、外見的にも「3+」の日本人と変わりないように見えるが、日本国籍を持たない故の彼らに対する差別も未だにある。日本に住んでいるのだから帰化して「本当の日本人」になってしまえばいいのにとこの声も聞くが、そんな簡単な問題ではない。1999年の小樽温泉事件の被害者・有道出人氏（元米国籍）は、帰化による「日本人」であったが、その外見上の明らかな違いから「Japanese only」とのサインを掲げた温泉で、入浴を拒否された。この事件は、人種差別として、後に裁判沙汰にな

った。かように、日本で「3+の日本人」であることは、実は「特権的」(privileged)なことなのである。日本なんだから、そんなこと当たり前だろうと主張する方々もいるかもしれない。しかし、この当たり前な「不可視的な特権」の顕在化は、日本人のコスモポリタン化や日本のグローバル化には重要なことだと思う。

海外に出た後、私の人種・民族的アイデンティティは、自分の中ではずっと「日本人」なのに、行く場所によって否応なく変更を迫られてきた。まず、日本で仕事を辞め、米国プリンストン大学の博士課程に受け入れられてすぐ、米国へ行くより先にロシアに留学させられた。当時の私は旧ソ連邦の民族問題に興味があり、錆付いたロシア語をどうにかしろと、大学院側が有難くも費用を負担してくれたのである。1990年代半ばのロシアは、旧ソ連邦崩壊後の混乱の時期にあり、ヌーボー・リッチが台頭してきた反面、日々の食事にも困るような人がたくさんいた。私のホスト・ファミリー達も例外ではなく、私が毎月入れる生活費で家族全員が生活していたようなものだ。本当にモノがなくて、ホスト・ファミリーの皆と一緒に、硬くなったパンのカビをナイフでこそげ落とし、バターやジャムをつけ、昨夜の出がらしの紅茶にお湯を足して飲むというのが朝食の定番だった。その頃ロシア人の間では、日本人に対して、こちらがこそばゆくなるほどの憧れ（というか幻想）を抱いている人が多かった。同じ留学生でも韓国系や中国系には無関心なのに、日本人女性である私は、どこに行っても注目の的。そして、ご近所の小さな子供が、リンゴやイチゴ等（彼らにとっては非常に高価で入手にくい食べ物）を、私に分け与えてくれたりするのだ。当時のロシアにおける日本人への憧憬の背景について説明すると長くなるので、ここでは省くが、彼らにとって、日本人は中国人や韓国人と区別すべき特別な民族であった。

その後、予定通りプリンストン大学で学ぶことになったのだが、ここでは、「日本人」であることに、付加価値がつくということはなかった。アメリカで、どんなに「私は日本人です」と主張し

ても、自分たちの人種カテゴリーを絶対的なものと信じているほとんどのアメリカ人にとって、私はタダの「アジア系」でしかない。公文書の人種欄記載に「その他」という選択肢が認められた後も、わざわざ「その他」を選択して「日本人」と記入したのにもかかわらず、勝手に「Asian and Pacific Islanders」という既成カテゴリーに変更させられたりする。人種カテゴリーが社会の基本的かつ重要な役割を担う米国では、極力、次のカテゴリーに自己分類することを望まれる：白人・黒人・白人系ラティノ・黒人系ラティノ・アジア系（人種や移民問題の研究者として困るのは、この米国独自の人種カテゴリーを、人類史普遍で他国でも使用されていると信じきっているアメリカ人が、知識人にも非常に多いことである）。米国では、特殊な職業でない限り、履歴書の写真添付はないし、年齢も書かないので、どの人種カテゴリーに分類されるかは、自分がメインストリームとして特権を享受できるか、または、少数民族優遇政策における資源の再分配の恩恵を受けられるか等、直接個人のライフ・チャンスにかかわってくる深刻な問題である。したがって、白人種が圧倒的に有利な人種社会において、皮肉にも、既に社会に受け入れられ、どう見ても白人にしか見えないネイティブ・アメリカン（インディアン）等が、DNA検査をして、少数民族優遇政策の恩恵に与ろうとするケースも出てくる。1960年代後半、米国では、移民政策における人種による割り当て制度も廃止され、様々な州で異人種間の婚姻も認められた。日本のような戸籍制度はないので、自分の家族の歴史を知らないアメリカ人も多い。Ancestry.com (ancestryは「先祖」という意味)のようなDNA検査ビジネスは、自己の（人種的）アイデンティティに不安を感じるアメリカ人の間では、今や大流行である。人種主義社会アメリカでのこのようなビジネスによって再構築された、恣意的な「人種」カテゴリーの功罪についての研究結果が待たれているところである。